日本人からの援助に対する留学生の否定的反応の分析[1)]

横　田　雅　弘

援助行動（helping behavior）の研究は，近年になって欧米を中心に社会心理学や発達心理学の分野で多くの業績が蓄積されるようになった．カウンセリングはそれ自体援助行動と深い関係をもつが，両分野からの接近は今のところほとんどみられていない．今までの援助行動研究を概観してみると，大別して援助の状況要因（援助コスト，傍観者効果など）に注目したものと，援助者の個体要因（援助者のパーソナリティ，性別，地位など）に注目したものがあるが，最近では，具体的な援助行動を分類してその構造を明らかにし，その個々においてそこに生起する起序を検討する研究がなされている（Staub, E. 1979；Amato, P. R. & Pearce, P., 1982；高木，1987 など）．これらの研究は，「拾いものと臓器提供の二つの行動の背後に同様の意志決定過程を想定することには無理があると思われる」（松井，1981），というように，個々の援助行動が持つ質的な相違を想定し，そこに構造を見出そうとしたものである．また，これらの分類に基づいて，非援助動機の構造研究なども行われ，種々の行動の非生起の特徴なども明らかになってきた（高木，1987 など）．けれども，これらの研究はいわば援助者の側からの研究であり，援助がそれを受ける者の存在を前提として初めて成り立つ行動であることを考えれば，被援助者の立場からの研究も不可欠であることはいうまでもない．しかも，多くの援助行動には，援助者と被援助者相互の物理的／心理的トランザクションが生起している．このように援助を相互関係の全体として捉えるならば，個々の立場からというだけでなく，両者のダイナミクスを検討することも必要となろう．被援助者の反応に

ついての研究は，Fisher らが1983年になって「New Directions in Helping」(Fisher, J. D., et al., 1983) というタイトルでまとめたことに象徴されるように，ごく最近になって本格的に注目されるようになった[2]．たとえば，援助行動における援助者の意図 (Intention) については，早くから多くの研究者が注目していたが，援助者の意図が被援助者にどのように認知されたかという問題は，援助—被援助トランザクションを大きく左右する．援助者がいかに愛他的意図で振舞おうとも，それがそのまま被援助者に認知されるとは限らないし，援助者が己の意図の利己性に気づかず，それを愛他的なものと思い込む心的合理化が問題を更に複雑にする可能性もある．また，たとえ援助の愛他的意図が被援助者に了解されても，被援助者はその援助によって心理的負債 (Greenberg, 1980) を感じて否定的な反応をするかも知れない．相川 (1988) も述べているように，援助行動を向社会的行動の一部とする見方に暗黙の内に存在する「援助に対する被援助者の反応は肯定的なものだ」という前提は，Fisher ら (1982) の研究が示す通り，多くのケースで妥当でない．このように，援助行動を援助—被援助トランザクションとして捉える視点は，その成果を実際に社会に適用する上で極めて実践的なものである．本研究では，援助者—被援助者のダイナミクスを直接扱ってはいないが，このような観点を踏まえて，援助及び援助者に対する被援助者の反応に焦点を当てる．特に，ここでは日本人からの援助に対して示された外国人留学生の否定的反応について分析を試みる．文化的背景が異なるという状況では，そこに生起する援助行動の種類や援助コストの認知などに違いが予想され，従来の研究成果をそのまま適用するには注意が必要であり，またその逆に，この研究で得られた知見がそのまま日本人同士，あるいは外国人同士の援助—被援助関係に妥当するとも一概には言えない．しかしながら，異文化接触状況では援助者と被援助者の援助行動及びその意図の認知にギャップが起こり易く，(一人よがりな) 援助がその受け手にとっては侮辱や攻撃と受け取られるというような状況が，実際に少なからずみられる．このように，異文化接触という状況では援助者，被援助者の双方に新たに考慮しなければならない要因があると同時に，否定的な反応がかなり明確な形として現れ

ることが予想され，否定的反応の要因を分析する上では興味深い側面ももっている．援助行動のクロス・カルチュラルな研究はそれ自体非常に少ないが，(Feldman, R. E., 1968; Gergen, K. J. et al. 1975; Pearce, P. L., 1980; 吉森，1981，1982; Hing-Keung Ma, 1985; 高木，松本，1985 のほか，国内の人種間の援助関係を扱ったものとして Wispe, L. G. & Freshley, H. B., 1971; Harris, M. B. & Baudin, H., 1973 など）特に社会・経済の急速な国際化に伴う日常レベルの異文化間接触機会の増加と多様化を迎える日本においては，独自の研究が必要な分野であろう．上記にしたがって，本研究における具体的な目的を以下のように設定する．第一に，外国人留学生が日本人から受ける被援助体験において，どのような因子が彼らの否定的反応を引き起こすのかを検討し，更に，強い否定的反応の頻度と分布によって因子間の順位づけを行う．次に，その因子得点を用いて回答者の属性及び規範意識尺度（松井・堀，1979; 本間，1988）との関係を分析する．第二に，Tesser ら（1968）の被援助者が援助者に対して抱く感謝の度合を規定する 3 次元（援助者のコスト，被援助者にとっての価値，援助者の意図）が，否定的反応についても妥当するかどうかを検討し，更に，被援助者からみた被援助者と援助者の関係の深さ，及び援助を受けることに対する被援助者の意向確認の有無を追加変数としてその影響を検討する．被援助者と援助者の関係は，友人と他人のような形で操作されることが多いが，Pearce, P. L. (1980) も述べるように，全くの他人と多少であっても顔見知りの人など関係の深さのレベルによる区別が必要であろう．

第三に，物をもらうという形の援助において，もらうかもらわないかを規定する要因は何かを検討し，それに関して援助の状況要因，援助の魅力度，及び援助者に対する好感度がどのような構造をもつかを明らかにする．

本論文で扱う援助の定義:

Morse, S. J. (1983) によれば，援助行動とは，ある人から別のある人に提供されたある種の利益 (benefit) ないしは利益を意図された行動であり，被援助者の特定のニーズを満たすことを目的としたもので，かつ相互の契約，あるいは援助者の何らかの役割上行われたものではないものをさす．しかも，全て

の利益 (benefit) が援助となるわけではなく，それが被援助者の特定の目的達成を推進しようとしている（それが成功であれ失敗であれ）ことが援助者，被援助者，第三者（ただし，必ずしもこの三者全てである必要はない）に明かである場合に援助となる．従って，この定義に従えば，教師が仕事上行う手助けなどはここでいう援助には含まれない．また，本論文で扱ったエピソードは Bar-Tal, D. (1976) のいう非緊急場面の被援助体験となっている．

1) 本論文の作成にあたりご指導頂きました立川短期大学講師松井豊先生，学習院大学助手楠見孝先生，江森敏夫さん並びにアンケートの配布回収をお引受け下さいました留学生担当教職員の方々，お答え頂きました留学生諸氏に深く感謝致します．

2) 日本では相川 (1984, 1985, 1988) 及び西川 (1985, 1986) がこの視点から重要な研究を行っている．

〈方法〉

予備調査:

日本人から受けた援助，あるいは援助の申し出に対して，何らかのストレス，不安，当惑，あるいはフラストレーションを感じたエピソードを集めるために，自由記述式のアンケート調査と個人面接を合わせて32名の大学及び大学院留学生（男性20名，女性12名／西洋人9名，アジア人23名）に行い，得られた41の回答を分類して21のエピソードを選定した．41の回答のうち，自らの体験によらないもの（他人から聞いた，あるいはフィクションであるがあり得ると思うもの）は3例であったが，その3例とも類似する体験が自らの体験として別の被面接者により報告されているので，選定した21のエピソードは，全て少なくとも1名の留学生の実際の体験によるものである．このエピソードの内容は Table 1. に示す．本調査では，それぞれのエピソードに対して，もし自分がそのような状況に遭遇したとすれば，どの程度のストレス，不安，当惑，またはフラストレーションを感じるかが五段階評定により判定され，また実際に類似する体験に遭遇したことがあるかどうかが訪ねられた．

次に，Tesser, A. (1968) らのモデル (Gratitude$=\beta_1 I+\beta_2 C+\beta_3 V$: $\beta i=$

Table 1:　被援助体験〈21 のエピソード〉と類似体験の体験率

No.	エピソードの内容	体験率(%)
1	パーティに招待されたが，誰も私と話をしに来ない.	34.1
2	日本人の家庭に夕食に招待されたが，とても食べきれない食事を出されてしまった.	51.6
3	日本人の家庭に夕食に招待されたが，彼らはゆっくり食べながら，私がどのように食べるかを見ているようだ.	45.0
4	日本人の家庭に夕食に招待されたが，それは2週間以上も先のことなのに，今からきちんと時間も決められてしまった.	55.1
5	あるボランティア・グループから何か欲しいものはないかと聞かれたので，中古テレビを安く買いたいと言ったところ，突然，中古テレビが無料で届けられてしまった.	11.0
6	日本人学生人5,6人が話をしていて，私も仲間にはいるように誘ってくれたが，すぐに仲間内で早口で話しだしたので全くついていけなかった.	63.6
7	ある日本人学生は，よく私を他の日本人に紹介してくれるが，私はまだ親友と呼べるほどの仲だとは思っていないのに，「この人は私の親友の留学生です」と紹介する.	27.3
8	あまり自分とは関係のないパーティに招待されたのに，今日は留学生の方もみえていらっしゃるので，とスピーチをさせられた.	46.9
9	ふとんをくれたとき，今度あなたの国へ行ったら案内してくださいと言われた.	34.9
10	服が欲しいと言ったら，使い古しで，かなりすりきれた服をくれた.	10.2
11	「これさしあげます」というメモとともに，あまり欲しくないストーブが部屋の前に置いてあった.	12.5
12	田舎の友人の実家に招かれて，夏休みに何日も泊めてもらった上，帰るときにおこずかいだといってお金までくれた.	18.9
13	日本でしてはいけない作法などについていろいろと教えてくれるが，こちらの聞かないことまであれもこれもこまかく説明される.	47.2
14	銀行で，お金の送金の仕方を教えてほしい，と銀行の人に言ったが，「はいわかりました．おまかせください.」と言って，全部銀行員がやってくれた.	33.6
15	日本を案内してくれたが，途中もう疲れてきたと言っても，「もう少しだからだいじょうぶ」と言われて最後まで案内された.	28.6
16	もう6カ月以上日本にいるのに，キップの買い方など，あまりにも簡単なことをまだていねいに教えてくれる.	41.3
17	まだあまりよく知り合っていないのに，夕食に招待してくれたり，おみやげをくれたりする.	45.6

18	買物にいくと，買ったものよりも多くくれることがある．	19.8
19	生活が大変だろうからと，石鹸やティッシュペーパーなど全くの生活必需品を持ってこられた．	23.0
20	はじめとても親切にしてくれるのでつきあっていたが，そのうちある宗教に入らないかと勧められた．	31.2
21	ある活動のためのミーティングで，各自仕事の責任分担を決めたが，あなたは留学生だからそこまでやってもらうのはかわいそうだと言われ，責任分担からはずされた．	40.9

Empirically determined beta weights, I=Intention of benefactor, C=Cost to benefactor, V=Value of benefit) をもとに，援助者と被援助者の関係の深さ，被援助者の援助に対する意向の確認の有無をコンテクストの構成要素として加味した架空のエピソード（〈扇風機〉と名付ける）を作成した (Table 2). このエピソードでは，I は利己的意図を感じさせるもので，C と V は低条件であり，援助者と被援助者の関係は知り合ったばかり，意向の確認は無しという設定になっている．上記のモデルによれば，この条件では被援助者が援助者に対して感じる Gratitude は低い．本調査では，もしあなたがその留学生であったならば，その扇風機をもらうかもらわないか，援助者 A にどの程度の好感を持つか（7段階評定），この援助にどの程度魅力を感じるか（7段階評定），更にエピソードのアンダーライン部分が，どの程度否定的反応の原因になっているかが5段階評定で判定された．

Table 2: エピソード〈扇風機〉

(1) 先日のパーティで会ったばかりで，まだあまりよく知らない日本人の A さんから，留学生のPさんのところに，どうぞ使ってくださいという手紙と，(2) 新品の小型扇風機が (3) 突然送られてきました．

P さんは，自分の部屋は風通しがよいので，(4) 扇風機はあまり必要ないと感じていましたが，せっかくですかもらうことにしました．お礼を言いに A さんの家を訪ねると，(5) すごく大きい立派な家で，お金持ちであることがわかりました．お礼を言って話をしていると，彼に (6) 実は自分の小学生の息子には，ぜひ国際人になってもらいたいので，ときどき面倒をみてもらえないかと頼まれました．

本調査：

1. 調査方法

調査期日：1988年6月21日～7月6日

手続き：16校の大学の留学生担当教職員にこの研究の目的等を説明し，各校10名の留学生にアンケートに答えてもらうよう依頼した結果，13校より114名の回答を得た．更に東京のH大学とJ大学の留学生に回答を依頼し，全合計156名の回答を得たが，無回答の多いもの及び明らかに質問を読み違えていると思われるもの25を除き，131を標本として用いた．但し，このなかには1～2の質問に無回答があるものを11例含むが，解析上ペア単位の除去を行ってこれらの欠損値を処理した．

2. 回答者の属性：Table 3に示す．

Table 3: 回答者の属性

1. 性別	男性	(72)	女性	(59)
2. 年齢	25歳未満	(76)	26歳以上	(55)
3. 出身（国）地域	中国	(12)	韓国	(27)
	台湾	(31)	その他のアジア地域	(43)
	欧米・オセアニア	(15)	その他	(3)
4. 日本での滞在期間	6カ月以下	(4)	6カ月～1年未満	(9)
	1年～2年未満	(36)	2年～3年未満	(31)
	3年以上	(51)		
5. 日本	初級：最低限の日常会話ができる／辞書をひいて簡単な日本語なら読める			(13)
	中級：日常会話ならばだいたいできる／辞書をひいて簡単なレポートならば書ける			(60)
	上級：授業についていける／レポートが書ける			(57)
6. 親しい日本人の友人の有無	有	(102)	無	(28)
7. 現在の経済的な生活状況	全く苦しくない	(15)	かなり苦しい	(29)
	ほとんど苦しくない	(38)	非常に苦しい	(4)
	少し苦しい	(44)		

3. 質問紙の構成：フェイスシート，規範意識尺度質問紙，及び被援助体験の質問紙1・2から構成されている．規範意識尺度の測定には，松井・堀（1979）の12項目とそれを基にした本間（1988）の20項目のうち留学生に理解され易いと思われる12項目を選定して用いた．回答形式及び得点化の方法は松井・堀（1979）に従う．この尺度は3つの下位尺度（第1尺度：一般的援助規範，

第2尺度：互恵規範，第3尺度：非関与の規範）より構成されており，それぞれ得点が高いほど苦しい立場にある人を助けるべきであると考え，恩を大切に考え，他人に干渉しない方がよいと考える，と解釈される．

〈結果〉

〈20のエピソード〉の因子分析：

被援助体験の質問紙第二部〈21のエピソード〉への回答が因子分析（最尤法—バリマックス回転）により解析された．これらのエピソードのなかには，厳密に言えば，被援助体験とそれにまつわる体験が組み合わされたものと，被援助体験そのものについて述べられたものが混在している．特にエピソード番号21〈宗教への入信の勧誘〉は，因子分析（バリマックス回転，因子数4）の第3因子において単独にとび抜けて高い数値（0.99）を示したが，これは，このエピソードの中に援助についての具体的記述がなく，勧誘の部分が特にクローズアップされ，援助と言うよりもだまされたと感じたものが多い危険があるので，このエピソードを分析から削除した．

更に，類似体験の有無が否定的反応の大きさにどの程度の影響を及ぼしているかをみるためにT検定を行った．その結果，項目番号（6），（9），（16）の3項目において類似体験有が無よりも強い否定的感情を体験していた（$p<.05$）が，全般的に類似体験の有無と否定的感情の大きさとの間に一様な関係は見出されなかった．

最終的に，20のエピソードについて第3因子まで抽出された．第3因子では，回転前の因子負荷量の2乗和が1以下（0.91）となったが，解釈可能としてこれを生かした．回転後の因子負荷量及び寄与率は Table 4 に示す．

第1因子についてみると，「19. 生活必需品を持ってこられた」，「18. 買った物よりも多くくれる」，「11. ストーブが部屋の前に置いてあった」，「17. よく知り合っていないのに，夕食に招待してくれたり，おみやげをくれたりする」，「12. 何日も泊めてくれた上におこずかいだといってお金までくれた」など，物あるいは金をもらうという援助を受けたが，いきすぎであると受け取ら

Table 4: 〈21 のエピソード〉の回転後の因子負荷量と寄与率

No.	第1因子	第2因子	第3因子	No.	第1因子	第2因子	第因3子
1	−.084	−.049	.526	11	.626	.233	.231
2	.145	.306	.238	12	.573	.082	−.039
3	.136	.098	.476	13	.134	.537	.160
4	−.040	.510	−.071	14	.371	.309	.040
5	.493	.413	−.151	15	.311	.446	.172
6	−.129	.225	.729	16	.133	.429	.081
7	.189	.120	.342	17	.615	.152	.049
8	.382	.082	.262	18	.649	.334	−.033
9	.287	.362	.232	19	.772	.183	.021
10	.407	−.081	.447	20	.471	.007	.132
			寄与率（%）		16.7	8.8	8.5
			累積寄与率（%）		16.7	25.6	34.1

れたエピソードが多い．また，物的援助でないものでは，「21．留学生にはかわいそうだと責任分担からはずされた」(.47) が比較的高くなっている．従ってこの因子は，そのような援助を受ければ，被援助者が実際にそうであるかどうかにかかわらず，自分の劣位・窮状を認めることになるというエピソードに高いと解釈される．それでこの因子は“劣位・窮状の肯定”と命名された．第2因子の得点の高いものには，「13．こちらの聞かないことまでこまかく説明される」，「4．今からきちんと時間を決められてしまった」，「15．疲れてきたと言っても最後まで案内された」，「16．余りにも簡単なことをまだ丁寧に教えてくれる」，「5．安く買いたいと言ったのに，突然中古テレビが届けられた」など，援助者の過剰な世話が，いらぬお節介であったり，被援助者の意志を尊重しない，または自由を拘束するという結果になっているというエピソードが並ぶ．従って，第2因子は，“個人の意志や自由の侵害”と解釈された．

第3因子では，「6．仲間にはいるよう誘ってくれたが，早口で話すのでついて行けなかった」，「1．パーティに招待されたが，誰も話をしにこない」，「3．夕食に招待されたが，私がどの様に食べるか見ているようだ」など，コミュニケーションが期待される状況に誘われたにもかかわらず，実際にはその状況の中で特異な存在と見られて敬遠されたり，逆に珍しがられ，注目されたという

エピソードが高得点となっている．また，「10．すりきれた服をくれた」は，第1因子と共にこの因子でもある程度の高さ（.44）を示すが，それはこの経験を，普通くれないようなひどい物をくれたと受けとることで，なんらかの疎外感を感じているためと理解できる．これらは全て，留学生が異質な者として日本人から心理的な距離をおかれている状態と考えられることから，この因子は“心理的距離の存在”と命名された．

回答者の属性及び規範意識尺度との関係：

以上の3因子の因子得点を用いて，フェイスシートで尋ねた項目及び上記の規範意識尺度得点をT検定並びに分散分析により検討した結果，性別，年齢，出身地域の各項目において統計上有意となった．Table 5にそれぞれの因子得点の平均値を示す．但し，ここで用いた規範意識尺度（松井・堀，1979；本間，1988）は日本人を対象として作成されたものなので，得点を因子分析し，前述の3つの下位尺度が測定されているかどうかを確認した．その結果，恩・互恵規範尺度を除き混乱がみられた．日本語理解が充分でない留学生にとっては誤解しやすい文章があったことと，日本との文化的な差異からみて不適当な質問項目が含まれていた可能性があるが，そもそも多種の異なる文化的背景を持つ留学生に，同一の質問項目によって共通する規範意識を測定しようとすることに無理があったとも考えられ，今後の課題として残された．本研究では，混乱のあった項目を削除する形でこの規範意識尺度得点を参考として用いたが，統計上有意とならなかった．

Table 5: 性・年齢・出身地を変数とする因子得点（因子1～3）の平均値

変数	N	平均値／1〔SD〕	／2〔SD〕	／3〔SD〕
男性	72	−.14〔.94〕	−.16〔.71〕	−.21〔.75〕
女性	59	.17〔.76〕	.19〔.81〕	.26〔.86〕
25歳未満	76	.13〔.88〕	.09〔.76〕	−.07〔.86〕
26歳以上	55	−.18〔.83〕	−.12〔.79〕	−.09〔.79〕
中国	12	−.58〔.51〕	−.39〔.62〕	.15〔.83〕
その他のアジア諸国	101	.10〔.89〕	.09〔.76〕	−.03〔.82〕
欧米・オセアニア諸国	15	−.10〔.83〕	−.34〔.90〕	−.07〔.95〕

性別では，第1因子（$t_{(131)}=2.06$, $p<.05$），第2因子，（$t_{(131)}=2.62$, $p<.01$），第3因子（$t_{(131)}=3.37$, $p<.01$）の全てにおいて女性が男性よりもこれらの影響を強く受けている．各エピソードについてT検定を行ったところ，5%水準で(3)，(10)，(11)，1%水準で(1)，(2)，(6)，(15)，(17)，(18)に有意差があった．男性の平均値がわずかでも上回ったのは(21)だけで，その他全てのエピソードで女性の平均スコアが高かった．

男女別に年齢（25歳以下と26歳以上の差）を検討したが，有意差は認められなかった．但し，その年齢別に性差を検討すると，25歳以下では女性が第3因子において有意であり（$F_{(1.74)}=9.05$, $p<.01$），26歳以上でも第2因子で女性に高い傾向がみられた（$F_{(1.53)}=3.97$, $p<.06$）．

出身地域では，(1) 中国，(2) その他のアジア諸国，(3) 欧米・オセアニア諸国についての分散分析の結果，(2) その他のアジア諸国において第1因子（$F_{((3.127)}=3.06$, $p<.05$）及び第2因子（$F_{(3.127)}=2.75$, $p<.05$）が有意に強くはたらいている．但し，(2)，(3) に含めた国の間にもかなりのばらつきがみられ，またサンプル数が少ないのでこれに関しては再調査が必要である．

否定の強度からみた各因子の順位づけ：

どのような被援助状況においてより強い否定的感情を体験しているかを検討するために，各因子において因子負荷量の高い4項目（第3因子については3項目）のカテゴリ度数の分布と平均をもとに因子の順位づけを行った．その結果，否定的感情を「非常に感じる／かなり感じる」と答えたものと，「全く感じない／あまり感じない」と答えたものの平均の割合は，それぞれ第1因子では42%[SD=9.86]，32%[SD=6.09]，第2因子では31%[SD=6.17]，40%[SD=9.80]，第3因子では50%[SD=5.43]，24%[SD=5.09] であった．すなわち，この3因子のうちでは，第3因子“心理的距離の存在”が最も強い否定的な感情を引き起こしやすく，ついで“劣位・窮状の肯定”（第1因子），最後に“個人の意志や自由の侵害”（第2因子）の順になっていると考えられる．

エピソード〈扇風機〉の分析結果：

はじめに，このエピソードに示された(1)～(6)のアンダーライン部分が，

どの程度援助者Aに対する好感度とこの援助に対する魅力度を説明しているかが重回帰分析により検討された．結果を Table 6, 7 に示す．この結果から，この援助に対する魅力度に関しては，〔1〕(〔1〕〜〔6〕は (1)〜(6) に対応する) 援助者との関係の深さ，〔3〕援助を受けるかどうかについての被援助者の意向の事前確認の有無，〔4〕被援助者にとっての（この援助の）主観的価値，及び〔6〕援助者の意図，がかかわっており，これらの要因が援助の魅力度に否定的に作用する程度は〔6〕，〔1〕，〔3〕，〔4〕の順に大きく，特に〔6〕援助者の意図の影響が大きいことを示している．また，(5) で操作された援助者にとってのコストは，ここでは有意な説明変数にならなかった．更に，(2) 扇風機が新品であることは，単独でみればこの援助に対する魅力度を高めていることがわかった．但し，この (2) は (1)（援助者と）知り合ったばかり，及び (3) 突然に送られてきた，との間にある程度の正の相関を持っている．(1)〜(6) の相関係数行列を Table 8 に示す．

次に援助者Aに対する好感度をみると，〔1〕援助者との関係の深さと〔6〕

Table 6: 援助者に対する好感度の重回帰分析

変数	標準偏回帰係数	F値
(1)	−.26	8.51**
(2)	.32	12.23***
(3)	−.21	5.61*
(4)	−.19	5.24*
(6)	−.40	27.38***

*p 〈.05　**p 〈.01　***p 〈.001

Table 7: 援助に対する魅力度の重回帰分析

変数	標準偏回帰係数	F値
(1)	−.18	4.04*
(6)	−.20	4.91*

*p 〈05

Table 8: 状況要因の相関係数行列

変数名	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
(1) よく知らない人	—	.38	.45	.15	.05	.01
(2) 新品		—	.39	.39	.33	.04
(3) 突然送られた			—	.30	−.02	.06
(4) 余り必要ない				—	.17	−.08
(5) お金持ち					—	.21
(6) 返礼の期待						—

援助者の意図のみが有意な説明変数となっているが，援助に対する魅力度の場合と比較して全体的に説明力が弱く，両者の（1），（6）を比較するとかなり弱いことが示された．但し，Aに対する好感度と援助に対する魅力度の間には強い相関（0.72）が認められる．

次に，物をもらうという形の援助において，何が被援助者にもらうかもらわないかを決定させる要因となっているかを探るために，（1）～（6）の状況要因，援助の魅力度，援助者への好感度を変量とし，これを順次加算して判別分析を行った．個々の状況要因（(1)～(6)）に変数増加法を適用すると，〔1〕援助者との関係の深さのみ選択される（$F_{(1.121)}=4.39$, $P<.05$）が，的中率は55.3%と極めて低く，状況要因はそれぞれ単独ではほとんどもらうかもらわないかを判別できないことがわかる．最も判別力が高いのは，援助者に対する好感度であり（的中率69.1%），これに援助への魅力度を変数として加算しても的中率の上昇はみられなかった．

〈20のエピソード〉の第1因子と〈扇風機〉の結果の検定：

物をもらうというエピソードに高い第1因子と援助者に対する好感度7段階評定（好感度は－3，－2／－1，0，＋1／＋2，＋3の3群とした）を分散分析にかけた結果，第1因子を強く持つ者ほど好感度が低い（$F_{(2.127)}=3.78$, $p<.05$）ことが示された．また，追加変数とした〔1〕援助者との関係の深さと〔2〕援助に対する被援助者の意向確認の有無においても，第1因子が高い者ほどこれらを否定的な評価の原因と考える傾向が強い（〔1〕：$F_{(1.122)}=2.94$ $p<.1$ 〔2〕：$F_{(1.123)}=9.48$, $p<.01$）ことが分かった．

〈考察〉

20のエピソードの因子分析：

第1の目的のために，20のエピソードから3因子が抽出され，第1因子“劣位・窮状の肯定”，第2因子“個人の意志や自由の侵害”，第3因子“心理的距離の存在”と命名された．第1因子は，その大部分が物をもらうという状況にかかわっているが，被援助利益からみれば低い場合（エピソード10，11，19）

と，高い場合（エピソード5，12）が含まれている．予備調査のインタビューによれば，前者に対しては「自分の窮状を確認することになるのはつらい」，「そこまで困っていると思われたくない」と言った自分の内に向かう感情と，「少し非常識ではないか」といった援助者に対する怒りの感情が共に，あるいはその一方が体験されており，後者に対しては「何もせずにそんなに高いものをもらうのは潔しとしない」というプライドと，「そんなにしてもらっては申し訳ない」という心苦しさが体験されている．同様にこの因子の高いエピソードであっても，その次況や被援助者の内的要因（パーソナリティ等）によって実際にはかなり異なった感情体験になっていると考えられる．

第2因子は，物的な援助以外のお節介といった項目に多くみられる．物的なものにもお節介な援助はあるが，ここではより観念的な事柄として，独立した個人の自由や意志の尊重，あるいは成熟した個人としての尊重が脅かされることが問題になっている．この因子が否定的反応の強度の次元で一番低いことは，この因子の意味するものが，今のところ比較的自我関与度の低いエピソードに現れていることと，留学生としては，多少自由や意志が尊重されていないと感じられても，それを一般的に個の尊重の観念が低い日本文化だからと受け取り，多少の我慢は仕方がないと考えているためではないかと思われる．

第3因子には強い否定的感情を体験している者が多い．それは，心理的距離の存在が，孤独感や疎外感といった強い情動反応を引き起こしやすい因子であるためと思われるが，更にこの因子の高いエピソードの内容が，「10．すりきれた服をくれた」を除き，援助そのものではなく，援助とそれに付随する状況を説明しており，反応は援助から離れて付随状況に向けられたという可能性もある．しかし，むしろこの因子が出現するのは，このように援助が本質的なものでなく，表面的で形だけのものとして提示された場合に多いことが重要である．このグループのエピソードは接触経験率も比較的高く，日本人の閉鎖性と言われるものと結びついていることを考えると，援助者の側からの検討も必要であろう．

次に，因子負荷量を見ると，第1因子に高いエピソードが多いが，それでも

寄与率は16.7%と低く，第3因子まで含めた累積寄与率は34%となっている．これは収集された20のエピソードがかなり多様なものであったこと，これらのエピソードの受けとり方（援助に対する反応）が被援助者の個人特性，文化的背景あるいはそのときの気分などによってばらつきが大きいものになる可能性があること，更に，尋ねられた「なんらかの否定的感情」には，不安，怒り，フラストレーション，心苦しさなど幅広い感情が含まれたことなどが原因となっていると考えられる．

フェイスシート項目との関係：

女性が全ての因子で高かった原因には，エピソードの内容で，食事の場面，買物の場面，服をもらうなど，女性にとってより身近に感じられると思われる項目が多かったことがあげられるが，これらの因子に対して女性により感受性が高いことも考えられる．第3因子“心的距離の存在”において，より若い世代（25歳以下）で女性が男性に比べて有意に高いことは，一般的に若い世代の女性が孤独や疎外に対して反応しやすいとも考えられるが，同時にこの因子が日本人の閉鎖性に関係が深いことを考えると，それに対する寛容性の違いとも考えられる．

出身地域は，モイヤー（1987）の日本における留学生のストレスに関する研究でも変数（西洋とアジア）として検討され，「価値観のずれ」などの成分で有意差がみられ，本研究でも重要な変数となることが期待されたが，サンプル数の不足から充分な検討ができなかった．今後の再調査の参考として述べるならば，第1に中国のスコアが他のアジア諸国（特に台湾）と異なる分布をしていること，第2に中国を除くアジアをみても，その中でかなりの分散がみられることなど，援助に対する否定的反応については，より細かく個々の文化の支持する規範の差異を検討することが必要と思われる．

また，本調査では，個人の規範意識尺度の測定はできなかったが，今後援助の意図や非言語的メッセージに対する感受性など，被援助者の内的特性との関連もあらためて検討したい．

エピソード〈扇風機〉の分析：

Tesser ら (1968) のモデルは，被援助者が援助によって感じるものは基本的に肯定的なものとして捉えられているようだが，いくつかの研究は援助に伴う否定的反応を説明している．Greenberg (1980) の心理的負債 (indebtedness) の理論 ($I=x_1B+x_2C$：I は心理的負債の大きさ，B は被援助利益，C は援助者のコスト，$x_{1,2}$ はそれぞれの重み) に従えば，被援助利益が大きく，援助コストも大きければ，被援助者の受ける心理的負債は増大するが，Tesser のモデルでは被援助利益と援助コストの増加は援助者に対する感謝の程度を高める．両者は一見相反するようにみえるが，それらは共に我々の日常経験に照らして了解可能なものである．しかし，否定的反応には上記の Greenberg (1980) のように，被援助体験において受けとられた何らかの肯定的側面に付随するものだけでなく，Fisher ら (Fisher, et., al., 1982) が自尊心に対する脅威モデルで示したように，援助そのものが被援助者に脅威となる場合もある．このように，現在のところ被援助者の反応については単一のモデルで説明できる理論はなく，それぞれがある局面を説明するにとどまっている．エピソード〈扇風機〉は，そのアンダーライン部分 (4) (5) (6) によって Tesser ら (1968) のモデルの3次元を変数とするが，感謝の程度は最も低くなる組合せとした．

第2，3の目的のために，重回帰分析及び判別分析を行った結果，このような組合せでは，援助の状況を規定する要因〔1〕〜〔6〕は，個別には援助を受けるか受けないかを直接規定しておらず，その全体としては援助者に対する好感度よりも，援助に対する魅力度をよく説明していること，更に，物をもらうという判断には，援助に対する魅力度よりも，援助者に対する好感度が大きな要素となっていることが分かった (Fig. 1)．〔1〕〜〔6〕の中では，どれ程この援助が魅力的か，及びどれ程この援助者に好感を感じるかを説明する要因として，〔6〕援助者の意図（返礼の要求）と〔1〕援助者との関係の深さ（余りよく知らない）の負の影響が大きく，特に魅力度に関しては〔6〕が大きいことが分かった．しかし，〔6〕と〔1〕の影響が正であるようなケースについては，これらの状況要因が，援助者に対する好感度よりも援助の魅力度をよく説明するとは必ずしも言えないであろう．援助者の意図は，それが強く肯定的なものと

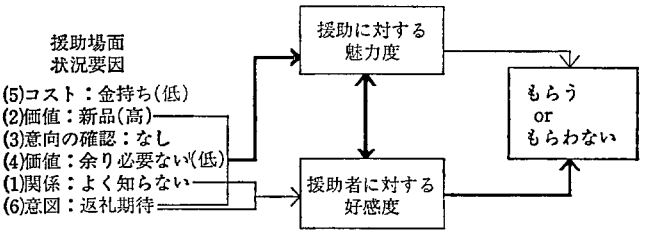

Fig. 1: 援助を受ける／受けないの判断にかかわる要因とそのプロセス

受けとられた場合には，直接援助者に対する好感度を高めることが予想されるからである．西川（1986）は，援助者に対する好意度には，意図性がさほど強くはないが直接効果を持ち，更に「うれしさ」を経由して同程度の間接効果も持つことを報告している．次に，〔5〕援助コストは本研究では説明力を持たなかったが，Tesser ら（1968）の研究でも，被援助利益と援助意図に比べて安定しないという傾向が示されている．彼らはこの結果について，援助コストが被援助者にとっては自我関与の低い要因であるためと説明している．この説明は，心理的負債の低いケースについては妥当すると思われるが，相川（1988）は，Greenberg（1980）のモデルを修正して，援助コストが顕著な状況では，被援助者の注意は援助コストに向き，その結果，援助コストが被援助利益よりも心理的負債の大きさを決定する重要な要因となることもあり得ることを明らかにしており，心理的負債の考え方からすれば，援助コストが必ずしも自我関与の低いものであるとは言い切れない．(1)～(6) の相関をみると，被援助価値高の条件とみられる (2)「新品である」が，被援助価値低の条件である (4)「余り必要ない」との間に多少正の相関を持つことが注目される．これは，扇風機が余り必要でない人にとっては，新品の物をもらうことはよけいな心理的負債を負うことになると感じられたと解釈できる．また，(2) は単独ではこの援助に対する魅力を高めているが，(1) (2) (3) 相互に若干の相関が認められることは，余りよく知らない人から突然新品の物が送られることが，全体として否定的に作用していることを示している．Tesser ら（1968）のモデルには，〔1〕援助者との関係の深さや〔3〕援助を受けることに対する被援助者の意向

確認の有無は変数とされていないが，現実の援助—被援助場面におけるこれらの要因は重要であることが示唆された．これらの要因は，第1因子の高い，物をもらうというエピソードの中に繰り返しみられるもので，この因子との相関の高さによっても支持されている．

以上によって，本論文の目的はほぼ達成されたと考えるが，文化差の扱いなどでは充分な検討ができなかった．今後のより綿密な研究が期待される．

引用文献

相川充　1987，被援助者の行動と援助，中村陽吉・高木修共編著「他者を助ける行動の心理学」光生館

相川充　1988，心理的負債に対する被援助者利益の重みと援助コストの重みの比較．心理学研究　58, 366—372

Bar-Tal, D. 1976 Prosocial behavior: theory and research. New York, John Wiley and Sons

Fisher, J. D. et al., 1982 Recipient reactions to aid, Psychological Bulletin 91, 27—54

Greenberg, M. S. 1980 A theory of indebtedness. In K. Gergen, M. S. Greenberg, & R. Willis (Eds.), Social exchange: Advances in theory and reseach. New York: Plenum 3—36

本間道子，1988　非関与の規範が援助行動に及ぼす効果—都市空間における—日本女子大紀要　37, 51—62

松井豊・堀洋道　1979　大学生の援助に関する規範意識の検討　日本心理学会第43回大会発表論文集

松井豊　1981　援助行動の構造分析　心理学研究　52, 226—232

モイヤー康子　1987　心理ストレスの要因と対処の仕方—在日留学生の場合—異文化間教育　1，アカデミア出版会　81—97

Morse, S. J., 1983 The Nature of help-related interchange as a determinant of person's attitude toward other. In New directions in helping (vol. 1.) J. D. Fisher et al. (Eds.) New York: Academic Press

西川正之　1986　返礼義務感に及ぼす援助意図性，援助成果，及び援助出費の効果　心理学研究　57, 214—219

Pearce, P. L. 1980 Strangers, travelers, and grayhound terminals: A study of

small-scale helping behaviors. Journal of Personality and Social Psychology 38, 935—940

Tesser, A., Gatewood, R. & Driver, M. 1968 Some determinants of gratitude. Journal of Personality and Social Psychology 9, 233—236

参考文献

相川充 1984 援助者に対する被援助者の評価に及ぼす返報の効果 心理学研究 55, 8—14

相川充 1985 援助に対する被援助者の反応に関する研究 (1)—恩義の大きさによる被援助事態の分類 日本心理学会第49会大会発表論文集

Amato, P. R. & Pearce, P. 1983 A cognitive-based taxonomy of helping. In Smithson, M et al. (Eds.) Dementions of helping behavior. Pergamon Press

Fisher, J. D. et al. 1983 New directions in helping. New York: Academic Press

Feldman, R. E. 1968 Response to compatriot and foreigner who seek assistance. Journal of Personality and Social Psychology 10, 202—214

Gergen, K. J., Ellsworth, P., Maslach, C., & Seipel, M. 1975 Obligation, donor resources, and reactions to aid in three cultures. Journal of Personality and Social Psychology 31, 390—400

Harris, M. B. & Baudin, H. 1973 The language of altruism: The effects of language, dress, and ethnic group. The Journal of Social Psychology 91, 37—41

Hing-Keung Ma, 1985 Cross-cultural study of altruism. Psychological Reports 57, 337—338

Staub, E. 1979 Positive social behavior and morality (vol. 2). New York: Academic Press

高木修, 松本敦 1985 「在日インドシナ難民」に対する援助の意識と行動 関西大学社会学部紀要 16, 23—70

高木修 1987 順社会的行動の分類 関西大学社会学部紀要 18, 67—114

高木修 1987 非援助動機の構造とそれに基づく非援助行動の特徴づけ 関西大学社会学部紀要 19, 27—49

吉森譲, 永井滋郎, 太鼓矢晋 1981, 1982 児童・青年の国際理解の構造 (第4・5報) 広島大学教育学部 学部附属共同研究体制研究紀要 9, 47—54; 10, 67—75

Wispe, L. G. & Freshley, H. B. 1971 Race, sex, and sympathetic helping behavior; The broken bag caper. Journal of Personality and Social Psychology 17, 59—65

(一橋大学専任講師)